
PK使いと魔法使い

ミカンガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PK使いと魔法使い

【Nコード】

N0115BA

【作者名】

ミカンガム

【あらすじ】

最初に念動力を使ったのは一歳。念動力を使う事が楽しいと思っ
たのは五歳。念動力は便利だと思ったのは十歳。全日本超能力大会
で一位になったのが十七歳。そして、つまらない世界にさよならし
たのも十七歳。

思い立ったが吉日、は良い言葉だと思う

「神宮智人は全日本超能力大会にて優秀な成績を収めたのでこれを賞す」

ああ、そんな名前の大会だったっけ？ ぼんやりとした頭を働かせながら神宮智人は目の前で偉そうにふんぞり返る薄らハゲを見つめていた。

「おめでとう。数千人を超える参加者の中で一番になるのは容易ではなかったと思う。きつと努力を重ねてきたのだらう」

「はい。それはもう必死に」

真つ赤な嘘を堂々と述べながら、自分の右の手のひらを見つめる。この右手には、いやこの体には兵器なんかよりもよっぽど恐ろしいモノが宿っているらしい。

そのモノは、神宮に念動力の力を与えていた。

「そうだらう。皆超能力の種を持っていると言うが、それを昇華させるのは大変らしいな」

種、つまり才能。

何十年前からかは覚えていないが、人類に劇的な変化が起きた。

それは超能力の出現

すでに生まれていた者には一切宿らなかったが、新生児にその現象は顕著に現れた。

物を浮かばせるサイコキネシスもあれば、発火能力のパイロキネシスもあった。

当時相当な議論があったが、様子見という意見が大多数を占めていた。

そりゃあ危険因子はすべからず排除すべきだという意見もあった。だが世界中の新生児ほとんどにこの現象が見られたので、生まれてくる新生児を処分していつでも人類は滅びるという当然のことに気付き、様子見なわけだ。

だが、超能力者の親はどう受け止めるか？

すごい！ 名誉なことだ！ とプラス思考で受け取るか。

……気持ち悪い、とマイナス思考で受け取るか。

大半は前者だった。

しかし、後者の反応も確かにあった。

自分からは超能力者は生まれないと信じ、子供を産み、絶望する。そして気持ちの悪い子供は棄てられる。

神宮の両親は、後者の反応を取った。

しかし神宮はどうとも思っていない。

神宮という名前は自分が考えた名字だし、親の顔は見たことすら無い。

だが今こうしてぴんぴんしている。

詰まるとこと別に親などいなくても、問題は無かったのだ。

「君は、サイコキネシスを使えるんだったな。今見せてはくれんかね」

「まあいいですよ」

まず辺りを見渡す。

人々人々、人しかない。

まあ日本初の超能力大会の表彰式なので注目がない方がおかしいとも言える。

「何か浮かばせられる物があれば良いんですけど」

あ、あるじゃないか。

今目の前にわかりやすい物が。

やる事が決めれば後は簡単だった。

まずイメージ。

頭の仮想ギアを一気に回転させて何かの力を発生させる。

そしてその力を作用させたい物質に向けて放出する。

これが神宮の超能力のイメージだった。

「……確かに、これはすごいな」

驚く薄らハゲの目の前で、賞状がぴらぴらと浮かんでいた。

手で支えているのではなく、サイコキネシスでだ。

「すごいって言うより便利って言葉の方がぴんと来ます。勝手に掃除はしてくれるし、洗濯もしてくれる。雑用係ですよ、俺のサイコキネシスは」「ぎ、雑用か」

薄らハゲは苦笑いを浮かべた。

この大会の趣旨は『日本で一番強い超能力者を選出して、世界大会に推す』というものだった。

だが、一番強い超能力者が超能力の事を雑用係扱いしている。

闘争心に欠ける奴だな、と薄らハゲは思う。

「ま、そういう点ではサイコキネシスが最高ですよ。パイロキネシスなんて生活のどこで使うんだか」

決勝戦は笑いを堪えることで必死だったことを思い出した。

予選の集団戦を勝ち抜いて、本戦の個人戦。

その決勝戦で神宮は、パイロキネシスの使い手と当たった。

別にここまではおもしろくない。

パイロキネシスの能力者は予選でも本戦でもくさるほど見たからだ。

おもしろかったのは、そいつが放った台詞。

正直言って、舌戦をしにきたのか、とさえ思った。

そして、その台詞とは『サイコキネシスがパイロキネシスに敵うわけがないだろ！』だ。なぜそうなった？

なぜサイコキネシスがパイロキネシスよりも弱いと決まってるんだ？

そのわけがわからない自信に対して、神宮は心の中で大爆笑をしていた。

大爆笑しながらもサイコキネシスを行使してあっさり気絶させたが。

「だいたいパイロキネシスって火をおこすだけじゃないですか。危ないったら、ありや？」 おかしい。

薄らハゲがかなり取り乱している。

見つめる先は神宮の背後。

今の台詞に驚かせるような要素は全くない。
つまり驚きの理由は神宮の台詞以外にある。

「ああ。そういうことか」

薄らハゲの驚きには、自分の身が危ないという気持ちも含まれている。

それだけで、何が起きているのか察することが出来た。

「しつこいなっ！」

振り向く。

そしてギアを、回す。

たったのツーステップ。

そのたったのツーステップで、直径１メートルの火の玉が止まった。

薄らハゲはほっとした雰囲気を含み隠さず表情に表している。

「これじゃあ殺せないぞ」

ギュツと右の手のひらを握りしめると、火の玉はパンツと風船が割れるようにして消え去った。

何が起こったのか簡単に記すと、襲撃があつたからそれを退けた、それだけである。

単純だが悪意がみっちり詰まった行動だ。

「……あそこか。やっぱり自信くんだったな」

神宮の視線の先には、慌てふためいている決勝戦で戦った相手が見えた。

パイロキネシスのことをコケにした神宮に腹が立ったのだろう。しかしあっさりと奇襲を退けられてかなり動揺しているようだ。みつともなく走ってドームの出口の方へ向かっているのが遠目でも確認できる。

「追いかけた方が、いいか？」

競技以外で超能力を使い人を傷つける、または傷つけようとした場合は犯罪行為になるので警備員が追走を始めた。

しかし観客はおもしろがって見ているだけだ。
自分の身に起こっていることでなければおもしろいことなのだろう。

「……追いかけるか。警備員じゃ何も出来ないだろうし」

見たところ警備員は四十代くらいの男性だったので、超能力世代ではないはずだ。

そうだとすると反撃にあって無用の怪我を負ってしまうかもしれない。

「あ、そう言えば新技あったんだよなあ」

かなり前から考えていた新しい力の使い方。

しかし、何となくその使い方をするのは躊躇われた。

「まっ、いつか。成功したらあいつのすぐ前に出られるだろうし、失敗しても、死ぬだけだからな」

そう呟いてから右手をドームの天井に掲げる。

そして、振り下ろした。

右手が完全に振り下ろされると同時に、神宮の目の前の空間にヒビが入る。

そのヒビは大きくなっていき、神宮の体と同等サイズになるまで空間を割り続けた。

割れた先は、真っ暗で何も見えない。

「な、なんだこれは！」

最初に反応したのは薄ら八ゲ。

「次元の裂け目です。たぶんここをくぐると、俺が思い浮かべた場所に出られると思います。今回は火の玉を撃ってきた奴の目の前に出たいなあ。走らなくて済むし」

「そ、それはテレポーターのことか？」

世の中にはかなりレアだがテレポーターも存在する。

神宮的にサイコネシスの能力以外だったらこの能力が良かったと思っっている。

「まあそう考えてもいいですよ。ただ、こんな使い方はしたことが

ないので、成功するかはわかりませんが」

言いながらも神宮は裂け目の中に入ろうとする。

だが薄らハゲの話はまだ終わっていないようだった。

「し、失敗したら死ぬと言うことだろう！ 何もそんな事せずとも、あの男は」

捕まる、と言いたいのだろう。そして神宮を世界大会に出場させ日本の選手が優秀であるということを知らしめたいのだろう。

「いいじゃないですか。もし俺が帰ってこなかったら、あの男を世界大会に出せば問題は無いです。パイロキネシスを使えばPK使いも簡単になぎ倒せるはずです。あいつマジ強かった。ええマジで」

「し、しかしっ！」

まだ何か喋るつもりのようなうだ。

だがもう、聞く気はない。

「あー、足が滑ったー」

と、わざとらしく声を上げて裂け目に身を投げる。

瞬間的に、目の前が真っ暗になった。

音も聞こえないし何も見えない。落下しているのか制止しているのかさえもわからない。

だけど、いいや。

死んだら死んだとき、別に生きてても寝てることくらいしか楽しいことはなかった。

だったら死んでいても同じじゃないか。

なら二酸化炭素も出さないし食料もいらなから死んだ状態の方がお得じゃないか？

「あー、それは盲点だった」

そんな絶望感百パーセントの台詞を言い終えると、光が見えた。扉のような形で、ここへおいで、と言っているように思える。

「お招きになっちゃあ、行くしかないよな」

そう考えたが最後、扉から滲み出るようにして光が伸びてきた。そしてその光は神宮を優しく包み込んだ。

「この光で、布団作りたいなあ」

そんな出来もしない願望を頭に描きながら、光に身をゆだねる。

目覚めたとき、自分はどくなっているのか。

自信男の目の前に出るか、それともここで眠り続けるのか。

できれば……………後者が良いなあ。

思い立ったが吉日、は良い言葉だと思う（後書き）

というわけで始まります。ただ他の作品も書いているので投稿は遅くなるかもしれません。

何かお気づきのことなどあれば教えてくれれば幸いです。
感想も、一応待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115ba/>

PK使いと魔法使い

2011年12月31日06時48分発行